Kogakuin University

東日本大震災を中高生はどう受けとめたのか
― 中高生のアイデンティティ発達の視点から ―

安　部　芳　絵

How did Teenagers Respond to Great East Japan Earthquake: In Terms of Identity Development of Teenagers

ABE　Yoshie

Abstract

Experiences of natural disasters have a considerable influence on the development of children. Various studies have examined the effects that interfere with children's development, such as post traumatic stress disorder symptoms. However, the potentially positive aspects of disaster experience that encourage children's development have received little attention. To fill this gap, the present study examines data obtained in interviews and submissions from teenagers and adults recorded in the report using qualitative coding focus on their "role". Results suggest that roles teenagers played after the Great East Japan Earthquake may have contributed to the adolescent developmental task of identity formation.

要　旨

災害は、子どもの発達に大きな影響を与える。心的外傷後ストレス障害をはじめとして、子どもの発達を妨げる影響については、さまざまな研究が展開されてきた。しかし、災害体験が子どもの発達を促すという積極的な側面はこれまでほとんど研究されてこなかった。そこで、本研究では、「震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト」における、中高生・大人からの投稿およびインタビュー調査で得られたデータを、「役割」を中心に定性的コーディングを行い分析した。その結果、震災後に中高生が何らかの役割を果たした経験が、青年期の発達課題の１つであるアイデンティティ感覚の形成に寄与していると考えられることが明らかになった。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

1．研究の課題

災害は、子どもの発達に大きな影響を与える。心的外傷後ストレス障害をはじめとして、子どもの発達に心理的な課題となって現れる影響については、さまざまな研究が展開されてきた（服部・山田、1999）（冨永、2012）（本田、2012）。一方、災害体験を通して子どもの発達が促される側面については、これまで体系的な研究はなされていない。

震災後の厳しい状況のなか、中高生世代が自ら考え率先して動くようすを多くの大人が目の当たりにした。炊き出しを手伝う高校生、高齢者を背負って移動を助ける中学生、小さな身体で思い水をバケツリレーする小学生。保育所や幼稚園の再開のめどがたたないとき、「中高生たちが幼い子どもと遊んでくれたから、生活を再建する第一歩を踏み出せた」という声もあった。被害が少なかった地域からも、物資の仕分けや泥かきなどのボランティアに多くの中高生が参加した。

子どもたちの動きは、多くの被災地域で目にすることができた[1]。仙台市の中学校教師である大木は「学校が避難所となるなかで、もっとも頼りになる存在だったのは中学生と卒業生の高校生だった」と述べる。それは日常ではあまり目にしない光景であったが、「学校に行けば誰かに会えるし、塾も部活動もなくて時間があったから行っただけ」という中高生たちを前にして、大木は「逆に彼らの日常の方が忙しすぎたのか」と考えた。そして、「子どもたちは、震災でおとなになったと思うし、ずいぶん助けられた」と実感している（大木、2012：16）。このような日常とは異なる子どもたちの動きは、言い換えれば東日本大震災がもたらしたことである。果たして震災体験は、子どもの発達にどのような影響を与えたのだろうか。

そこで、本論文では、『震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書』における、中高生・大人からの投稿とインタビュー調査の結果を「役割」に着目して定性的コーディングし分析することによって、災害体験が子どもの発達をどのように促していくのかを明らかにすることを目的とする。

2．プロジェクトの概要と研究方法

2－1．実施目的

「震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト」は、公益財団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが主催し、一般財団法人地域創造基金みやぎが実施主体となり、文部科学省・復興庁等の後援を得て、2012年10月～2013年3月にかけて実施された。プロジェクトでは、「大規模災害に留まらず、地域の防災・減災、或は円滑な避難を実施する上で、昼間の時間帯を中心に地域にいる中学・高校生は大きな役割を果たしうる」[2]という認識のもと、東日本大震災において中高生が具体的にどのような役割を果たしたのかをいずれ忘れ

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

去られてしまう「記憶」にとどめるのではなく、「記録」として残し、広く共有することを目的として実施した。

2−2．概要

2012年10月～2013年1月にかけて投稿を受け付け、2013年1月～3月にかけて個人・団体計7組により詳しい話を聴くためのインタビュー調査を実施した。

投稿を呼びかけた対象の中心は中高生と大人である。対象の中高生には、当時小学校高学年や高校生だった人も含め、幅広く募ることとした。投稿当時の年齢で最年少は9歳、最年長は72歳であった。居住地は、被災地域である①東北6県にくらす中高生および、②東北6県以外にくらしているが東北域内で活動をした中高生とした。大人に関しては、「中高生に助けられた、中高生の働きを実際に見た人」を対象とした。プロジェクトの告知は、学校へのポスター掲示、東北地区で購読されている新聞社やテレビ局・ラジオ局など100社へプレスリリースの配信、ウェブサイトでの発信である[3]。

以上の結果、中高生から156通、おとなから49通、計205通の応募があった[4]。

2−3．研究の対象と方法

応募に当たっては、「中高生用」と「おとな用」の投稿用紙を用意し、応募後はまとめて冊子にし東北その他の地域に伝えていくことを明記して配布した。インタビュー調査については、投稿してくれた人のうち、詳細の聴き取りを承諾し、日程があった人のなかから7組を対象に、「実際に果たした役割の詳細」、「やってみてどうだったか」、「震災後に中高生が果たした役割を記録することをどう思うか」の3点について半構造化インタビューを行った。1回のインタビューは30～60分であり、許可を得てICレコーダーに録音し、文字起こしをしたものを本人に確認してもらった上で、それぞれ2-4頁にまとめた。以上を合わせて、2013年4月に『震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書』を発行したが、子どもの果たした役割の実際をありのままに伝えようという趣旨から、すべての投稿に手を加えず、インタビューも本人の意向を尊重して掲載しており、回答の分類や分析はしていない。

そこで、本研究では、中高生の震災体験の実態を把握するため、報告書に記録された投稿とインタビュー結果を分析対象とした。具体的な方法は、投稿について①どんなことをしたか、②なぜ、それをやろうと思ったか、③やってどう思ったか、④周囲の反応はどうだったか、⑤やってよかったと思うこと、⑥おとなのコメント、の6つに分類整理した。これに、⑦インタビュー調査の結果を加え、子どもの発達の観点から再分析するという方法を採用した。

なお、筆者は、本プロジェクトの実施にあたり、企画段階からインタビュー調査、報告書の執筆・作成に至るまで全面的に協力した。

2−4．分析をはじめるにあたって

分析をはじめるにあたって、205通の投稿のなかにあった「自宅がツナミにあいとくに何も出きませんでした」(宮城県、11歳[5]) という一文について考えたい。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

「中高生が果たした役割」というと、震災という大変な状況にあって、何かを成し遂げた中高生は素晴らしく何もできなかった人はだめだ、という誤解を与えがちである。しかし、このプロジェクトの目的は中高生による美談を集めることではない。目的は、中高生が震災後に果たした、あるいは果たせなかった役割をありのままに記録することである。

であるからこそ、「何も出きませんでした」という一文だけでなく、すべての投稿を、事務局が手を加えることなく掲載した。投稿後に実施したインタビューも、まとめるにあたっては本人の意向を確認するために何度かやりとりを重ねたものもある。

また、「何も出きませんでした」が示唆することは、205通の背景に、応募できなかった/しなかった中高生の声がまだまだたくさんあるだろう、ということである。それらの声に想いを巡らせつつ、応募してくれた205通の記録を活用[6]していくためにも、現段階での分析が必要であると考える。

2－5．分析の視点

青年期の始まりは、一般的に第二次性徴とそれに伴う心理的変化の出現におかれているが、その終わりは始まり以上に複雑であり「青年期を終えるということは、成熟・完熟した一人前の“大人”になること」(和田、2002：5）である。和田は、「“大人になる”というのは、エリクソンの人格発達理論における青年期の心理的社会的危機を示す用語である“アイデンティティ”の確立といってよい」と指摘する。(和田、2002：6)。それは、自分の存在意義はなんであるのか、自分は何者であるのかを問うことであり、その答えを導くことは容易ではなく、中高生の発達を考える上で大きな課題のひとつである。

平石は、ボランティア体験等社会的活動の果たす役割を、「アイデンティティ形成のための「役割実験」の体験」と考えることができると指摘した。役割実験とは、エリクソンが使用した用語であり、モラトリアムな時期に青年が自由な役割実験すなわちさまざまな役割を経験し、試すことによりその社会の中で自己の適所を発見するとされている。このような家庭や学校を離れた体験は「新たな世界と自分を発見させるのに寄与」する可能性を有するのである（平石、2011：96-98)。

そこで、本研究では、震災体験を通して中高生が果たした「役割」を中心に調査結果に定性的コーディングを行い、それが中高生の発達、とくにアイデンティティ形成をどのように促したのかを分析の視点とした。

3．中高生の東日本大震災体験

3－1．どんなことをしたか

震災直後から、中高生は避難所の内外でさまざまな役割を果たした。

避難所の中で多かったのは、水くみ、物資の運搬・仕分け・配布、子どもと遊ぶ、トイレの設置と掃除、ごみの収集であった。このほかには以下のようなものが挙げられる。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

「小学校に避難している人の避難者名簿作成を手伝った」（宮城県宮古市、15 歳）

「避難所での、朝・晩のごはん作りをした」（岩手県山田町、17 歳）

「地震で怖がっている 1、2 年生を励ました。泣いている人もいたからみんなで歌を歌ってあげた」（福島県、12 歳）

「6：30 からのラジオ体操をやった」（岩手県陸前高田市、12 歳）

避難所の外ではどのような役割があっただろうか。

「（ホタテ・わかめの）養殖作業の手伝いをしました。その他、力仕事などを手伝いました」（岩手県山田町、18 歳）

「友達を家のお風呂にいれた（何度も水をくんでおふろに入れた）」（宮城県多賀城市、9 歳）

「ガソリンスタンドの前で止まっていた車をガソリンスタンドまで押した」（福島県会津若松市、19 歳）

「老人ホームに行ってベッドメイキングとおむつ交換、食事介助、服の着脱を行った」（福島県喜多方市、19 歳）

避難所の内外を問わず、震災直後の状況やその地域の置かれた課題に対応する形で、役割を果たしており、内容は多岐にわたる。

一方、兵庫県立舞子高等学校環境防災科[7]の生徒たちの多くは、震災後に被災地域へボランティアに行き、被災をした方々へのニーズ調査を実施した上で、そのニーズを踏まえた泥かきや草取り、サロンの開催などのボランティア活動を実施した。

3−2. なぜ、それをやろうと思ったか

中高生たちは、なぜ、3-1. で示した活動をしようと思ったのだろうか。

「やれといわれたから」（岩手県山田町、水くみ、16 歳）

「小学校の先生にすすめられた」（岩手県陸前高田市、ラジオ体操、12 歳）

「水がとまって出なかったので。生活に必要だったから」（岩手県山田町、水運び、17 歳）

「みんながやっていたから」（宮城県石巻市、水や食料の運搬、13 歳）

「友達に誘われて始めた」（宮城県石巻市、物資の受け渡し、18 歳）

「学校から行くことになったから」（兵庫県立舞子高等学校、18 歳）

「家にいてもやることがなかったし、誰かのためになるならやろうと思ったから」（仙台市、炊き出しの配膳や一人暮らしの方々にお弁当の配達、14 歳）

このように、はじめたきっかけはそれほど積極的な理由ではない中高生も少なくない。

一方、状況の中で自然と動いたという例もある。

「お腹が減りすぎて早くご飯を食べたいと思い、調理室に手伝いに行ったことがきっかけ。最初は邪魔にされていたけど、慣れると仕事を任されるようになり、皆のためにと頑張ることができた」（岩手県山田町、ごはんづくり、17 歳）

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

「泣いていたから」(宮城県仙台市、同じ集合住宅の乳幼児と一緒に遊ぶ、16歳)

「見てて大変そうだったから」(宮城県仙台市、近所の人の分まで支援物資をもらいに行く、17歳)

「一人で車を押していたから」(福島県会津若松市、路上で止まっていた車を押した、19歳)

少しでも人の役に立ちたいという積極的な理由も見られた。

「自分の置かれている状況よりもつらい人がいると知って、その人達を少しでも助けたいと思ったから」(宮城県仙台市、物資の仕分け、15歳)

「少しでも、人のやくにたちたいとおもった」(福島県田村市、支援物資の運搬、12歳)

「看護を学ぶ者として役に立てれば良いと思った」(福島県会津若松市、介護の手伝い、19歳)

「最初の日の炊き出しで、もらった人々がほっとしたような感じでえがおになっていて、「こんな小さい事でも人々を助けられる!」とおもったから」(宮城県名取市、炊き出し、14歳)

舞子高等学校の生徒どうであろうか。

「阪神・淡路大震災のとき、生まれて間もなかったが、たくさんの人が神戸に来てボランティアをしてくれた。少しでも、恩返し出来たらいいと思った」(兵庫県立舞子高等学校、ニーズ調査とそれをふまえたボランティア活動、18歳)

「最初はみんな行くし行こうと思って。2回目は、何かもう少し役に立てることがあればと思って」(兵庫県立舞子高等学校、17歳)

3−3．やってどう思ったか

人がいのちをつなぐための水は、非常に重い。水くみをしたという中高生たちは、「つかれた」(宮城県仙台市、18歳)、「おもっっ!!」(宮城県仙台市、16歳)と率直な感想を記述してくれた。また、それゆえに「どれだけ貴重なものか改めて思った」(岩手県山田町、17歳)、「水の大切さや若い力が必要だと感じた」(岩手県山田町、18歳)という意見もあった。自分の成し遂げたことに、達成感を感じた中高生もいる。

「誰かのために役に立つというのはこんなにも気持ちのいいことなんだと思った」(宮城県仙台市、炊き出し、13歳)

「だんだんキレイになっていく母校や避難所を見て、うれしくなった。もちろん楽しかったし、やりがいがあった」(宮城県、避難所の掃除、17歳)

ところで、投稿してくれた中高生たちの多くは、自らも被災している。

「正直、私の家の被害は床上50センチの津波くらいでたいしたものではありませんでした。もっとひどい被害にあった方々を見て、もっと「何か役に立てないか」という思いが深まりました」(岩手県宮古市、避難者名簿作成、15歳)

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

「音楽、吹奏楽は人に感動を与える素晴らしいものだと思ったことと、自分自身も前を向いてがんばろうと思えた。私たち高校生が復興に一番重要な存在だと思った」（岩手県釜石市、吹奏楽部で復興コンサート、17 歳）

舞子高等学校の生徒は、当初、自然の圧倒的な力の前に無力感を覚えたが、被災された方々からの言葉で、自分の考えの捉え直しを行っている。

「やってもやってもキリがなく、ただただ無力感が大きかった。ボランティアをさせてもらったときの「アリガトウ」がとてもうれしくて逆に励まされている力になった」（舞子高等学校、17 歳）

「実際に目で見て、肌で感じて、においをかいで自然が怖いと感じた。ボランティアをしても自分一人の力でなにがかわるんやろ？と無力感を感じた。でも、向こうの方の感謝の言葉や、笑顔または泣き顔をみてつながっていこう、支えていこうと思った」（舞子高等学校、18 歳）。

3－4．周囲の反応

中高生たちの動きに対する周囲の反応で最も多かったのは「ありがとうと言われた」ことである。がれきからでている火を消すのを手伝い「消防団の人にも感謝された」（岩手県、消火活動、17 歳）という震災直後のエピソード、「おばあちゃん方に「みんなに会って話もできるし、体の調子もよくなった。ありがとう」と言われた」（岩手県陸前高田市、ラジオ体操、13 歳）という避難所での継続的な活動に対する感謝もあった。おとなの手が足りないときに中高生が動いたことに対して、おとなから「助かった」と言われたことを挙げている子どもも多かった。

最もこれらは、「ありがとう」「助かった」を言われたくてしたわけではないだろう。

「みんなは「すごいね」とか、「えらいね」などというけど、ぼくは、ほめられたいからやっていたのではなくみずからやった。人のためにやりたかった」（宮城県利府市、水くみ、13 歳）

これに対して、「反応は特になかった」という記述も少なくなかった。

「話すことでもないので周囲は知らない人の方が多い」（宮城県石巻市、物資の配布、18 歳）

「特にありませんでした。私の周りの人たちの大半が、被災地に赴きボランティア活動を行っていたので。私もその内の 1 人になっただけです」（宮城県石巻市、物資の配布、18 歳）

「みんな一生懸命でよゆうがなかったのでわかりません」（岩手県陸前高田市、避難者名簿作成、17 歳）

なかには、「缶コーヒーの配給があって子どもに配ったところその子の親に子どもに缶コーヒー飲めるわけないでしょ、もっと考えて配ってよと言われた」（宮城県東松島市、支援物資の配布、15 歳）のような例もある[8]。一方、友達からの反応もあった。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

「友達に「私もやりたかった」と言われた」(福島県、介護の手伝い、18歳)

「連日ではないけれど、友人がその話を聞いて手伝いに来てくれたりもした」(宮城県仙台市、物資の仕分け、15歳)

舞子高等学校のある生徒は、「私たちはボランティアとして現地に2～3日しかいないけど、現地の人は復旧・復興するまでの作業をしなければならず、できることは限られているんだと思い知らされた」と感じつつも、「再訪問するうちに、孫みたいだといってもらうことができた」(舞子高等学校、18歳)と記している。

3－5．やってよかったと思うこと

やってよかったと思うことについては、誰かのためになることをしたこと、自らが動いたことで周囲が笑顔になったことへの達成感が多く見られた。

これらに加えて、中高生たちが、役割を果たすことによりどのように変化していくのかも見ていきたい。

「大人に頼らず、中学生の私たちにもできることがあると実感できました。また、自分はひとりじゃない。みんながいる。と感じました」(宮城県、避難者名簿作成、15歳)

「一つのちいさな手助けでも、多くの人々を助けられるんだと思った。炊き出しの小さなおにぎり一つ、手渡すだけでもみんなの何とか生きていこうという感じが伝わってきた」(宮城県名取市、炊き出し、14歳)

「少しでも力になれたなら良かったと思います。看護を学んでいて役に立つことができたので看護学生で良かったと思いました」(福島県会津若松市、介護の手伝い、19歳)

以上のような記述からは、大災害に見舞われた中高生が、役割を果たすことで自己の存在意義を見出していくさまが見て取れる。

まちの復興に目が行くようになったという記述もみられた。

「誘われて始めたことでしたが、「ありがとう」と感謝していただけてとても嬉しかったです。地域の輪は改めて大切だと思いました。少しでも地域の方の役に立てて良かったです。」(宮城県仙台市、炊き出し、18歳)

「とても大変でしたが、実際にやってみることで、町の問題を自分自身の目で見て感じ取れたのは、とてもためになりました」(岩手県山田町、ホタテ・わかめの養殖手伝い、18歳)

舞子高等学校の生徒のなかには「自分が力不足」(17歳)だと感じた子もいる。それでも「実際に訪れてみないと分からないことが多い」(18歳)と感じたり、「忘れてはならない、伝えていくことの大切さを感じた」(18歳)と新たな決意を抱いた生徒もいた。5月に作業をさせていただいたお宅に、8月に再訪した生徒は、継続的な関わりの大切さを述べている。

「ヘドロで埋め尽くされていた(5月の)ビニールハウスとは違い、美味しそうな

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

トマトが沢山実っていた。その時に、僕たちの一人一人の力は小さいものであるけど、クラス全員で力を合わせたらこんなにも変わるのだと感じた。そして、ボランティアはやったその時だけではなく、これからも“つながり”を持ち続けると、現地の人も喜ぶし、僕も嬉しい気持ちになるのだなと思った」(17 歳)

3−6．大人のコメントから

中高生の活動を見ていた大人はどう感じただろうか。

岩手県釜石市の老人ホームで勤務していた 30 代は、地震発生の直後、津波がくるまでのわずかな時間に「私自身どうしたら良いのか分からない状態で、泣きそうになっていたけど」高校生たちの優しさに救われた、という。

「勤務していた老人ホームの利用者さんの避難を手伝ってくれた。周りで津波が来るのを見ている大人をよそに、その男の子達は、私が「すいません！まだ利用者が中にいるので助けてください！」と声かけすると、すぐに「どこですか‼」と走って来てくれた。そして、夜になって本当に小さい 1 口で食べれる様なおにぎりを施設で作り配ると「僕達は大丈夫です！　おじいちゃん、おばあちゃんにあげてください！」と。本当に助けられました」(岩手県釜石市、32 歳)

陸前高田市では、避難所でのラジオ体操を、中学生が自主的に始めた。

「生活のリズムを取り戻した。参加者で声をかけあったり、笑い声やおしゃべりの時間でもある。1 日の中でゆいいつ空を見上げる時間。子ども達から元気をもらう」(岩手県陸前高田市、48 歳)

中高生が幼い子を遊ぶ様子も見られた。

「避難所で被災した子ども達と遊んでくれていました。狭い避難所生活をしていた子ども達はとても楽しそうだった。あの状況の中、おとな達は子どもと遊んであげる余裕がなかった…。中高生たちがとても“たくましく”見えました」(宮城県多賀城市、36 歳)

断水、断ガス、停電の中で、中学生が手押しポンプで井戸から水を汲みあげたり、まだ冷たいプールからトイレへ水をバケツリレーで運んだりした。

「常々、今の若い者はという声を耳にしますが、決して全ての若い人たちがそうではなく苦難に陥ったり、人に役立つことがあれば進んで、あるいは誰かが誘ってくれれば社会の一員として前に向かっていきます。(略) とかく今の若者には夢がない、そして自暴自棄になっているといいます。そんな不透明な先の見えない世の中をつくったのは我々です。責任の大部分は私達おとなにあります。多くの犠牲になった方には申し訳ありませんが若い人々を見直す機会になったことは確かです。気持ち的にはちょっと優しくなった様な気がします」(宮城県仙台市、59 歳)

「若い人を見直した」という言葉にあるように、頼れる存在としての中高生は、日常ではあまり見えてこない部分であることが大人の投稿から伺える。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

3−7．インタビューから

インタビューを通して見えてきたことは、大きく5つある。

中高生たちがまず口にするのは、「こんなことでインタビューを受けていいのか」という言葉であった。宮城県立田尻さくら高等学校の佐々木将さんは、沿岸部へ送る物資の仕分や沿岸部に赴いての物資の配布をしたが、「被災者といえば私達自身も被災者なのでしょうけれど」とした上で、「私が震災時にしたことは本当にたいしたことじゃない」という。震災直後の気仙沼で、避難所指定されていなかったにもかかわらず地域の人がどんどん避難してくる状況を目にして、避難所を開設し、その運営を担った吉田祥さんは、「3年生が卒業した後だったから、2年生の自分達が動くしかなかった」という。宮城県の中学生、中島加奈絵さんは中学校が避難所になっており、そこでの食べ物の配布や、断水のためプールから水を汲んで来てトイレの前に溜めるという作業を先輩達5人と行った。「震災前は手伝いをしたり人前に出る機会」がなかったが、動ける人が少なかったため「自分がふだん使っている体育館にいるわけだし、自分でやりたいって思いました。基本的には中学生が動いていました」と述べる。岩手県の高校生、小林優人さん・秀人さんの双子は、震災前から相撲をやってきた。震災後、「自分の住んでいる地域で、自分達が何か力になれる事がないか」と考えた時に「自分達は力仕事とかそういうことの方が向いているな」と思って、ホタテ・わかめの養殖を手伝ったのだという。何も特別なことはしていない、震災を目の当たりにして動いただけだ、というのがひとつめのポイントである。

2つめは誰かのためだけではなく、自分にも返ってくるものがある、という点である。

> 「私の住んでいる地域は断水になっている家が多かったのですが、私の家では水が出ました。そこで地域の水がない人たちに配りました。（略）言葉じゃなくても、空気が変わったっていうのだけでも嬉しかったです。水がないと人は生きていけないから、ピリピリした感じだったけど、水を渡したら笑顔になって明るくなりました」（加藤乃亜、宮城県、中学生）

加藤さんは、震災前は、地域の人とあまり話す機会がなかったものの、震災後には地震で外に出るたびにあいさつや話をするようになり地域のつながりがより深まったという。そのような経験から、誰かに何かをするということは、自分にも返ってくるものがあるという。

> 「震災の時は不安だったけど、人に対して優しいこと、人のためになることをしているときは、自分の不安な気持ちが忘れられるし、何かすることで誰かのためになって、その人が笑顔でいてくれるってことに対して達成感がありました」（加藤乃亜、宮城県、中学生）

会津若松で介護の手伝いをした小林さんは、震災のように大きいことがきっかけじゃなくても、小さいことで困っている人がいたら手を差し伸べていきたいという。

> 「それはきっと自分に返ってくるから。ちょっとした一言で救われる時があると思います。一人じゃないねって」（小林美優、看護学生）

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

インタビューから見えてきたことの３つめは、自分の住むまちへの興味・関心が高まったことである。吉田祥さんは、震災直後に避難所の運営を担った経験を踏まえ、大学生になって気仙沼を離れた今も、気仙沼の情報をブログという形で発信し続けている。

「気仙沼でしか活動をしていないのですが、気仙沼のために何かしたいと思っていること、気仙沼のために何かをすることが大事かなって。震災前は、気仙沼に残りたいとか、気仙沼のいいところもそんなにわかりませんでしたが、山形に引っ越したり、震災が起きたこともあって「いいところ」が見えるようになりました」（吉田祥、大学生）

漁業を手伝った高校生、小林秀人さんも同様である。

「震災を通して山田にもっと貢献していきたいっていう気持ちが強くなった」（小林秀人、高校生）

４つめは、学校で学んできたことを、震災を通して捉えなおしたことである。震災後、医療従事者が少なくなった福島で介護のボランティアをした大和田望美さんは、高校で看護を学んできた。

「老人ホームでおむつ交換をしたり、食事介助のボランティアをしました。実習で疾患とか麻痺があるってわかってたんですけど、何にも情報がないままいろんな人を介護するのは大変だった。コミュニケーションが全部地震のことで、すごくつらかったんだなって伝わってきました。中には泣いている人とか「帰りたい」っていう人もいました。教科書上ではこうしなさいってわかっているけど、実際は余計傷つけたらどうしようって思って、うまくできなくて」

教科書のようにうまくはいかなかったけれど、その経験を通して大和田さんはこんな看護師になりたいというビジョンを見出した。

「もっと精神面でも関われるように勉強して、少しでも閉ざされた心を開けるような看護師になりたい」（大和田望美、看護学校専攻科）

高校で防災を専門に学んできた３年の野村ゆずさんは、初めて東北に行ったとき「高校生やからできることはない」と言われたという。

「初日に、一軒一軒訪ねて回って、最後のお宅を訪ねたとき、そこのおうちの人に「高校生やからできることはない」って言われました。環境防災科だし、せっかくこういう機会を与えてもらって行っているから、役に立てたらなっていう気持ちで行ったんですけど、パッとそういう現実をつきつけられると、「あぁやっぱりできることは、ないんかな」って」

これに対して、野村さんは、あきらめずに交渉をする。

「でもちょっとねばって、そのお宅で活動させてもらったんです。マットを洗ったり、いろいろして、結局そのお宅では２日間活動させてもらって、休憩時間とかに被災のお話を聴かせていただいて、最後には「ありがとう」って。「ちょっとでも

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

できることがあったんかな」って嬉しかったです」(野村ゆず、舞子高等学校)

5つめは、これからにどう活かすかという視点である。舞子高等学校の西尾栄美さんは、東松島や石巻の高校生とのワークショップを通して、震災を経験した中高生の声に耳を傾け、それを活かしていくことがまず大切だと思うようになった。

「たとえば石巻の子が「いっぱい言いたいことがあるんですけど」っていったその「いっぱい」のことを自分の防災に取り入れていくのが大事やなぁって。これからの東日本大震災の支援では、実際に経験した中高生の意見を活かしていくべきだと思います」(西尾栄美、舞子高等学校)

同世代が果たした役割を読むことは、まだ動いていない中高生動かすことにつながるのではないか、という指摘もあった。

「インタビューが冊子になったものを見て、やったことのない高校生や中学生がこういうボランティアにまた参加してどんどん増えていったらいいな」(佐々木智、田尻さくら高等学校)

「ぼくたちは環境防災科で防災を学んでいますが、自分がどうやって動いていいかわからないっていう同世代の高校生にぼくたちの記録を読んでもらって、「自分達の世代にもこういうことができるんだ」って知ってもらって、行動に移すきかっけになってもらったらいいな」(戸髙幸星、舞子高等学校)

気仙沼で被災を経験した吉田祥さんは、中高生にこそ記録を読んでほしいという。

「中高生は、一番傷つきやすい年齢だから、同じ経験をしてほしくありません。今自分達にある悲しい感情をまた繰り返してほしくない。そのために記録を読むことで経験を追体験して、同じ経験をしないようによりよくしてほしい。(略) 1000年に一度といわれるかもしれないけれど、1000年に一度のときに動ける人間になってほしいです」(吉田祥、大学生)

同世代や次世代の人に活かしてもらいたいというのは、環境防災科の太田直さんである。

「同世代の方にまずいっぱい読んでほしいなと思います。同世代ががんばっているとそれだけで自分も力になるので。つぎに次世代の人にも見てもらいたいです。私も阪神・淡路大震災の年に生まれて、阪神・淡路大震災のときに活動していた方のお話を伺ったりして、防災について学んできた。防災をやっているから、次にも何かが来るって思える。絶対に起こるって。こうやって防災を学んでいなかったら「次、来るわけないやん」って思ってしまっているかも知れないので、同世代や次の世代の人に、防災をもっともっと「絶対に来る」って備えてもらえたら」(太田直、舞子高等学校)

世代を継承することと同じくらい、地域を広げて行くことが大事だと指摘するのは同じく環境防災科の北川操奈さんである。

「私たちは阪神淡路があった神戸で生まれ育ったので、小学校のころから「しあわ

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

せはこべるように」とか歌って、避難訓練するっていうのは当たり前みたいな感じでした。でもちょっと離れた所だったらその歌すらも知らなくて、本当にすごい近い距離なのにそれすらもないんやって感じました。確かに次世代に伝えるのも大事だけど、場所、地域を広げていかないと、やっぱり他人事になっちゃうんで、他の地域に伝えることが大事だなと思っています」(北川操奈、舞子高等学校)

3−8．小括

中高生が果たした役割は、現代の日常生活の中では体験しにくいことがらである。役割の内容もそのきっかけもさまざまではあるが、多くの中高生が、大人から頼られ、責任を果たしていくことで自信や達成感を得ていた[9]。ときにはうまくいかず、自らの無力さに気づくこともあったが、自分の考えや経験を捉え直す機会として機能している例もあった。役割を果たすことを通して、自分自身や身近な問題から、まち全体、社会へとより広い世界へ目を向けていくようすも見て取れた。

4．中高生の震災体験の発達における意義と課題

4−1．中高生の震災体験とアイデンティティ感覚の形成

以上をふまえて、東日本大震災の体験が、中高生の発達にどう影響したのかを考察する。

溝上によれば、エリクソンは「「私はどこから来てどこへ行くのか」という過去から未来への自己の連続性、すなわち自己アイデンティティ（self-identity)」と「「これが私だ」という自己定義が他者や社会から是認されるという心理社会的アイデンティティ(psychosocial identity)」の２つの絡み合いにより、全体感情としての「アイデンティティの感覚（a sense of identity)」が形成されると考えた（溝上、2010：110)。

自己アイデンティティに関しては、たとえば、舞子高等学校環境防災科の生徒たちがよく口にした「私たちは阪神・淡路の年に生まれた」という言葉が象徴的である。彼らは、阪神・淡路大震災の年に生まれ、「被災地」である神戸で育った。だからこそ、東北の復興を支え、防災を広めていきたいのだと語る。加えて、「継続性」という言葉や、継続的に役割を果たしていくなかで、自分自身を捉えなおしていくありさまも、多くの中高生で見られたことであり、自己アイデンティティ形成につながっていると考えられる。

心理社会的アイデンティティに関しては、震災前と震災後で自分の住むまちに対する認識が変わったという例が挙げられるだろう。山田町の高校生、山田優人・秀人さんきょうだいは、地場産業である漁業が震災で危機に瀕したときそれを手伝ったが、大人たちから「明日はくんだべか」と頼りにされた経験を通して、山田町にもっと貢献していきたいと感じるようになってきた。気仙沼で避難所を開設・運営した吉田さんはその活動を通して「気仙沼で活動している多くの人」に出会い直しをした。震災前よりも気仙沼の「いいところ」が見えるようになり、故郷に対する見方が変化したことで、気仙沼のために何かしたいと大学生と

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

なり引っ越した今もブログによる情報発信を続けている。「助かった」「ありがとう」と他者から言葉をかけられる、大人から頼りにされることで、心理社会的アイデンティティの形成が促されている。

以上のことから、中高生の震災体験は、「役割を果たす」というプロセスを通じて青年期の発達課題の１つであるアイデンティティ感覚の形成に寄与しているといえるだろう[10]。

4－2．課題

実践的な課題としては、日常において、中高生の役割をどうつくっていくかということである。大人に頼られ、責任を果たす体験が中高生の発達を促すのであれば、災害時に限らずとも日常生活のなかでその役割をつくっていくことが重要である。ところが、現在の社会は、子どもが社会を担っていく一員であるとは考えていない。学校教育・社会教育のなかで展開できる余地は大きい。

次に研究面での課題である。大災害のような危機的状況が生じたとき、トラウマの治療や子どもの心のケアをはじめとして、子どもをいかに保護していくかについての調査研究は層が厚い。しかし、震災という過酷な体験が子どもの発達をどう促していくのかについては、より包括的なアプローチが求められる。本研究は「役割」という側面でしか論じることができなかったが、たとえば、災害からの回復について自己回復力（レジリエンス）発揮や、心的外傷後成長（PTG）の視点からの分析も求められるだろう（宅、2010）（近藤、2010）。阪神・淡路大震災、中越大震災など過去の災害が中高生の発達をどう促したのかについても検証されておらず、今後の研究が待たれる。

※本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B）研究課題番号 24730670「災害復興期に求められる子ども・子育て支援」研究代表者：安部芳絵、2012 ～ 2013 年度）による成果の一部を含む。

注

1　子どもたちの変化は多くの教師が記録している。たとえば福島県南相馬市の小学校教師である白木は、原発事故という破綻のあとに避難所や避難先、学校で子どもたちが見せた変化 ── 見ず知らずの人から受けた好意や支援に感謝の気持ちを持ったり、助け合って生きることの大切さに気づく子どものようす ── にふれ、「パンドラの壺に最後に残った「希望」」だと述べた（白木、2012：45-47）。

2　公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン『震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書』2013 年 4 月、p.2

3　ただし、プロジェクトへの応募は任意のものであり、投稿を強制しないよう、学校などを通じたはたらきかけにおいてはその点を十分留意してポスター掲示を実施した。

4　中高生のうち 7 通は白紙であった。

5　当時中高生だった人、現在中高生である人や、中高生に年齢が近い人も含んでいるため、対象者は厳密には中高生だけではない。また、報告書に明記された年令は、投稿当時のものであり、被災当時の年齢はそこから 1 歳半ほど若くなる。

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

6　これまで、名古屋市瑞穂消防署が中学生向けの防災教育に、また、高知県教育委員会学校安全対策課が県内の教員向け研修に活用している。

7　兵庫県立舞子高等学校環境防災科は、阪神・淡路大震災の教訓をふまえて、2002 年 4 月に設置された、日本で唯一防災を専門に学ぶ学科である。東日本大震災発生に際しては、2011 年 4 月より東松島市を中心に継続的にボランティア活動を実施、被災地域の高校生との意見交換も試みている。

8　インタビュー調査のなかでこのエピソードをより詳しく語っている。それによると、飲み物の配布をするにあたってコーヒーやジュース、サイダーのような選択肢のなかから選ぶ方法だと特定の飲み物が無くなってしまうという理由で、「1 組にいる人にはコーヒーね、渡しちゃって」と先生に言われたそうである。その後、母親から「コーヒー飲めないんだから考えて」と言われ「いやぁ、考えてって言われても先生に言われてるんで」と返したところ、「先生にもちゃんと考えてって言っといて下さい」と言われたらしい。その後、先生には伝えていないが、それは「言えません（笑）。先生も家とか帰れなくて、家族もどうしてるか分からない状況で、ものすごく疲れていたんで、この人たちを疲れさせたらいけないなーって」思ったからだと答えている。

9　たとえば、周りは誰も知らないので反応は特になかった、と答えた中高生であっても、自分の成し遂げたことが目に見えることで「役立てて良かった」（前掲書、p.45）、「たっせいかんがあった」（前掲書、p.50）と答えている。

10　これと関連して、国連子どもの権利委員会は、東日本大震災のような緊急事態下における子ども参加の重要性を指摘している。それは子ども参加が「子どもたちが自分たちの生活をふたたびコントロールする上で役立ち、立ち直りに寄与し、組織的スキルを発揮させ、アイデンティティの感覚を強化する」からである。

参考文献

大木一彦　2012「東日本大震災と子ども、学校 ── 仙台市の中心部の学校に勤務する一中学校教師の目から見て ── 」『教育』2012 年 3 月号 pp.12-19

近藤卓　2012『PTG　心的外傷後成長』金子書房

白木次男　2012「子どもたちと「希望」を紡ぐ」坂元忠芳『東日本大震災と子ども・教育　震災は私たちに何を教えるか』桐書房 pp.33-53

諏訪清二　2011『高校生、災害と向き合う　舞子高等学校環境防災科の 10 年』岩波書店

宅香菜子　2010『外傷後成長に関する研究』風間書房

冨永良喜　2012『大災害と子どもの心―どう向き合い支えるか』岩波書店

服部祥子・山田冨美雄編　1999『阪神・淡路大震災と子どもも心身　災害・トラウマ・ストレス』名古屋大学出版会

兵庫県立舞子高等学校　2012『阪神・淡路大震災から 17 年　東日本大震災から 1 年　災害と向き合った高校生たち』

平石賢二　2011「学校・社会の中での体験」平石賢二編著『改訂版思春期・青年期のこころ　かかわりの中での発達』北樹出版、pp.90-98

本田恵子　2012『被災地の子どもの心に寄り添う　臨床心理学からのアドバイス』早稲田大学出版部

溝上慎一　2010『現代青年期の心理学　適応から自己形成の時代へ』有斐閣選書

和田実　2002「青年期とその理解」和田実・諸井克英著『青年心理学への誘い～漂流する若者たち』ナカニシヤ出版、pp.1-10

（あべ　よしえ　本学非常勤講師）

NII-Electronic Library Service

Kogakuin University

NII-Electronic Library Service